# ウォルター・ペイターのフィクションにおける教養
## ジャンル〈想像の肖像〉を中心に

虹林　桜

## はじめに

本論では、世紀末期の文学者 Walter Pater (1839–1894)が提示した自己修養(“self-culture”)の概念を明らかにすべく、個人の人格形成を描く Pater 独自のフィクションジャンル〈想像の肖像〉(“imaginary portraits”)に属する作品 “Duke Carl of Rosenmold”を、教養という観点から読み直して考察を行った。具体的には、彼の説く教養の定義を確認し、それをもとに、主人公の心象風景描写から人格形成の過程を分析した。そして、Pater にとって自己修養とは、近代以降にあるべき理想の教養の姿であり、その鍵は自己の本質を知る好奇心にあるということを示した。

## １．Pater の自己修養　(“self-culture”)：　近代以降におけるギリシャ的精神の復活

「教養」(“culture”)は特にヴィクトリア朝社会において多義的な用語であり、その理解の難しさは Raymond Williams による有名な指摘でも知られる(*Culture and Society* 5–9)。その状況下で、当時台頭していた功利主義・物質主義等に基づく道徳観に対する広い意味でのアンチテーゼとして、人間性を高める教養の重要性を主張する批評家が現れた。これを背景に、Pater は内省的観点から、個人の人格形成を主とした自己修養の重要性を主張した。

Pater は、代表作 *The Renaissance* 中のエッセイ “Winckelmann”で、ヴィクトリア朝当時の人々が様々なことに気を奪われて自己を見失う傾向にあることを指摘し、当時の精神性の問題を解決するために自分自身との快活で平静な一致“. . . unity with ourselves, in blitheness and repose” (*Works* 1: 227)というギリシャ的精神の必要性を挙げる。そして、ギリシャ的精神が近代以降に息づく難しさを指摘しながらも、それが近代以降にいかにして再現可能かを考察する。これに関して Pater は、ギリシャ的精神を近代社会へそのまま持ち込まずに、それを「知性」(“intellect”)を主軸とした自己修養という概念に託すことで近代に復興させようと試みているといえる。自己修養のあるべき本性について、Pater は教養の様々な形態にそれぞれ独自の力を見出すことに主眼を置く(*Works* 1: 228–229)。Pater の自己修養は、特定のものに対する批評的な視点を磨く教養を目指すものではなく、様々なものを批評的に見極め、自己を内省して独自の価値観を導き出す視点を磨く教養を培うものであり、経験から受け取る美的感覚を確実にとらえるために感受性を洗練させることに終始している。Pater は自己修養に関して、*The Renaissance* 序文で主張する通り(*Works* 1: viii)、対象の事物を個人の感受性を通して見るという立場にあるといえる。

## 2. Carl の好奇心：　ギリシャへの憧れと自律的知性獲得への熱望 (“aspiration”)

本セクションでは、 “Duke Carl of Rosenmold”の読解を通じて、主人公 Carl の好奇心の感覚について論じた。18 世紀の美術史家 Winckelmann と Carl とは同じ魂を持つ関係性にあると指摘されており(Monsman 127)、Winckelmann との時代的関連性や、エッセイ“Winckelmann”に言及されるギリシャ的精神および自己修養との関連性を考慮すると、近代におけるギリシャ的精神を追求する自己修養という考え方は、“Duke Carl of Rosenmold”に最も具体的に示されているといえる。“Duke Carl of Rosenmold”は、18 世紀ドイツにおいて、滅びつつある想像上の公国 Rosenmold に啓蒙の瞬間が訪れるのを待つ若い大公 Carl についての作品である。中世時代の雰囲気が残る地方宮廷の浅はかさに失望した Carl は、自由を求めて自身の偽の葬儀を行い、個人的にギリシャ的精神の復活を試みる。彼は、古典古代への憧れや、自身の存在意義を明らかにしようとする自律的知性の獲得への「熱望」(“aspiration”)を通じた旅の経験により教養を身に着ける。Carl の“aspiration”が代表する好奇心の感覚は、“Winckelmann”において、失ったものを再獲得するかのような感覚(*Works* 1: 179)に説明されているといえる。

Carl の好奇心はアポロン神のイメージで表され、それは最終的に Carl 自身を象徴するものとなる。作品中、宮殿の蝋燭の光はドイツ国内の知的な光を、陽光は光の神アポロンに代表されるギリシャの知的な光を象徴するが、どちらの光にも喩えられる Carl の姿は(*Works* 4: 125)、蝋燭の火が陽光へと進化することを示唆しており、北方で生き延びようとする疑似的なアポロンを象徴しているといえる。また、Carl はドイツの精神性を擬人化した人物としても描かれる(*Works* 4: 123) 。ドイツという土地とアポロンという精神的イメージを両方備えた Carl は、作品中で北方のアポロン “northern Apollo” (*Works* 4: 128)と呼ばれ、古典古代の明るさと、それが失われた北国の暗さとを同居させた近代の新しいアポロン神として、自国ドイツに光をもたらすこととなる。

## 3. Carl の自己修養への過程①：外界への旅

本セクションでは、Carl の心象風景の描写を具体的に分析し、彼の好奇心が自己の内面へ向かうまでの自己修養の過程を考察した。Carl は実際に南方へ訪れたいという好奇心に駆られ、自分自身の世界と形容するドイツ

の森林地方 “his own wholesome German woodlands” (*Works* 4: 134)を探索する衝動に駆られるようになる。森の中を探索する場面では、Carl の心象風景の変化を通して、彼が再生するドイツの新たなイメージが描かれる。森の情景は風景画のように表現され、その情景の中にいる Carl の五感を追体験させるかのような記述となっている。それは、個人のキャラクターに価値をおく Pater 流のルネサンスの具体的な表現といえる。この表現により、ドイツの自然風景は Carl の心を反映するように描かれる。例えば、Carl の気分の乱れは “Clouds came across his heaven” (*Works* 4: 134)という一言に表現され、彼の心が外界の空と重なる描写は、Carl の心が外界の風景に映し出され、外界もまた Carl の心に映し出されるという相互作用を効果的に表している。また、この時、Carl の心に対する自然界の生気の作用は、“inaccessible hillsides and dark ravines” (*Works* 4: 134–135) のような近寄りがたい風景と共に、煩わしい妖精として描かれる。Carl の心情をドイツの自然風景に重ねるこうした描写は、彼の感覚の刺激を印象へとつなげることで、彼の外界への好奇心を自己の内部への好奇心へと転換させ、外界や自分自身と一致する自己修養の過程を表している。こうした外界への旅は、Carl の内面への旅に繋がっていく。

## 4. Carl の自己修養への過程②：内面への旅

本セクションでは、Carl の好奇心の外から内への方向性の変化と、彼の自己修養が結実する過程について論じた。Carl は空の棺を用いて自身の偽の葬儀を行うことで、宮廷生活から脱出し、新たな自己を形成する。こうして、Carl は自律的に知性を使う存在として再生し、何物にも遮られない外界へ、そしてあるがままの自己の内部へと、ドイツの川をたどって旅を始める。この段階では、宮廷から出る前に煩わしい妖精として表現されていた自然界の生気が幸福な霊として表され(*Works* 4: 142)、宮廷の内から外への環境の変化と共に、南へ向かう期待に燃える Carl の心境の変化を象徴している。そして、まだ見ぬ理想の国を目指して外部への旅を続けた Carl は、彼の心を映し続ける祖国ドイツの風景に触れる中で、 “the untried spiritual possibilities of meek Germany” (*Works* 4: 143)に気付く。Carl をドイツと重ねて描写する本作品の特徴から、これはドイツのみならず、Carl 自身の試みられていない精神的可能性をも示しているといえる。この気付きは、Carl 自身がどのような役割を果たすべきかという問いに変わり、彼は実際に南方へ旅する外向的推進力を、自己の本質を知る内向的推進力へと変換させる。

これを受けて、Carl はこれから自国に始まるであろう啓蒙に思いを馳せ、自国の外から啓蒙の光をもたらすのではなく、自らが自国にいて内面に培ってきた光を開示する解説者としての己の使命について考える(*Works* 4: 144)。この時、Carl の心に 愛国心が目覚め(*Works* 4: 144)、彼は教養の成果ともいえる啓蒙について、独自にドイツへの愛国心を取り戻し、自国に新たな精神が発現することを期待する。ここで Carl の好奇心は、“Winckelmann”における失ったものを再獲得する感情を超え、自身の教養の中で新たな形でギリシャ的精神を復興するという意味に変わる。それ以降、Carl は南方ではなくドイツに注意を向け始め、その姿にはアポロンの陽光、すなわち啓蒙は外部から自然のまま持ち込まれるものではなく(*Works* 4: 147)、北方のアポロンによって、自国の中で培われてきた文化の集積を開示することで成し遂げられるものであることが表現される。こうして彼の自己修養は、ドイツにおけるギリシャ的精神の復興と重なるように完成する。

## 5. 結論

ドイツ国内の旅を通じた自己修養の過程を経て、Carl の外的なギリシャ的精神への憧れは、そもそも自己の本質を知ろうとする内側に向かう好奇心の表れに他ならなかったことがわかる。このような Carl の精神は、本文の言及によると、後にドイツ古典主義によって成就される (*Works* 4: 152)。語り手は作品の最後に、Carl の精神が後の Goethe らに受け継がれたと記しており、作品の舞台から 50 年後に登場する幼少期の Goethe の姿に、Carl が偽の葬儀に使用した空の棺の復興を重ねる(*Works* 4: 153)。作品全体を通して、空の棺は Carl のギリシャ的精神が何度でも北方で復活し生き続けることを象徴しており、その機会を握るのは、彼が持ち続けた好奇心の感覚であるといえる。このことから、Pater の理想とする教養としての自己修養には、近代以降のいかなる時代においても、より向上した精神を熱望する魂 “aspiring soul” (*Works* 4: 153)とそこから発する好奇心が不可欠であると考えられる。

## 引用文献

Monsman, Gerald. *Pater’s Portraits: Mythic Pattern in the Fiction of Walter Pater*. Johns Hopkins UP, 2019.
Pater, Walter. *The Works of Walter Pater*. Cambridge UP, 2011, 8 vols.
Williams, Raymond. *Culture and Society*. Penguin, 2017.